

場所の内側性

—誰かにとっての〈ここ〉がつながりあう、都市の中の住宅群—

学籍番号 小野 優夏
指導教員

場所	ここ	そこ
都市	感情移入	実存

1. 制作背景と目的

電車の窓から見たマンションの一室の生活風景に愛おしさや懐かしさを感じることもある。そのとき私は、知らないその人のマンションの一室に意識が入りこむことで、〈そこ〉を〈ここ〉として認識する。

一方、現代の集合住宅等の建築では、壁や天井などの物理的に設定された境界で私的領域を守る傍ら、外界とのつながりが絶えやすくなっている。それによって私たちは空間の外のもの、すなわち〈そこ〉に対して「ないもの・気にしなくてよいもの」のように捉えやすくなっているのではないだろうか。

いま私がいる〈ここ〉を感じることで、時々他者のいる〈そこ〉に対して〈ここ〉を感じる。この感覚の行き来によって、都市が誰かにとっての〈ここ〉のつながりで形成されていることを認識する。

本制作ではそのような感覚によって、自己と他者を含めて構成される都市とのつながりを再認識できる建築を提案する。

2. “場所”と“場所の内側性”

エドワード・レルフ『場所の現象学』より、「場所」を自らの経験によって意味づけられた空間と定義する。

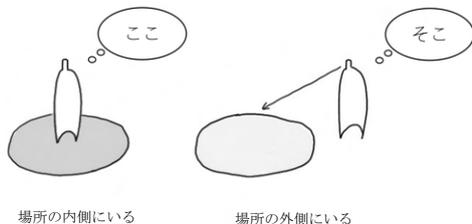


図1 場所の性質

私たちが場所の内側にいるとき、私たちは〈ここ〉にいると感じ、場所の一部となる。一方、場所の外側にいるとき、私たちは〈そこ〉を眺めている状態にある。(図1)

場所の内側・外側の境界は曖昧であり、逆転も起こり得る。それはあらゆる方法で場所の内側を経験することができるからである。

〈ここ〉の連続によって都市が形成される過程において、重要な二つの内側性をレルフに基づき取り上げる。それは肉体のある場所から、〈そこ〉へと意識が「行ったりの内側性」と「帰ってくる内側性」である。

3. 感情移入の内側性—意識が行ったきりの内側性—

自分の肉体が実在していない空間に対して、〈ここ〉を感じる場所の内側性。場所は心理的空間を中心に構成されているため、〈そこ〉に対して感情移入する/されることで〈ここ〉を感じる事が可能である。(図2)

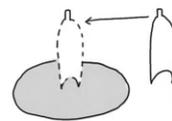


図2 感情移入の内側性

電車の中から、マンションの一室が見えたとき、私の意識は、電車内から幾重の空間を介して、その部屋の中に〈ここ〉として入り込む感覚を覚える。

一方、ラトゥーレット修道院の個室では、外の風景がバルコニーから窓を介して自身のいる〈ここ〉まで入り込んでくるような感覚を覚える。(図3)

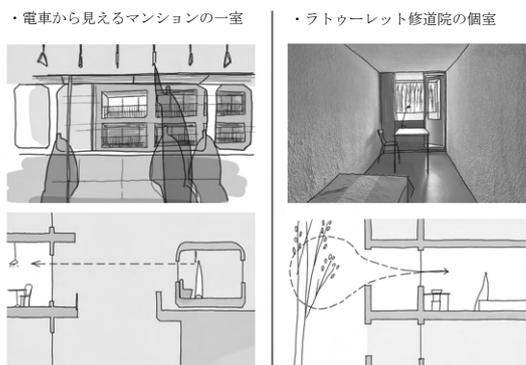


図3 感情移入の内側性の事例

図3に代表される事例から、場所の感情移入の内側性が発動される空間の分析を行なった。(図4)

(i)面の連続 (ii)視線軸と一致 (iii)動線軸と一致
いずれも、〈ここ〉から〈そこ〉への方向の軸を強く感じられる時に、感情移入が起こりやすいと考える。

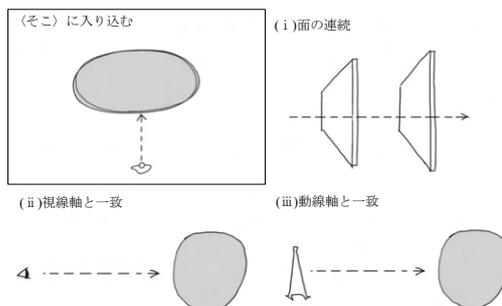


図4 感情移入の内側性の空間分析

4. 実存的内側性 -意識が帰ってくる内側性-

〈そこ〉を認識することで、いまいる〈ここ〉を物理的・心理的により強く感じる場所の内側性。(図5)

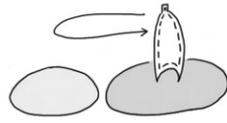


図5 場所の実存的内側性

栗林公園掬月亭では、周りの池や山に向けられた意識が、庇や柱間に囲まれた自身の肉体のある〈ここ〉に、再度帰ってくる感覚がある。

また栗津邸（設計：原広司）の庭とつながる高さ1200mmの掃き出し窓のある室内では、鬱蒼とした庭が外に出た意識を再び反射させるような感覚を覚える。また、くぐらなければ庭の全景を捉えられないため、動作よりも意識の方が先に外へと出る。(図6)

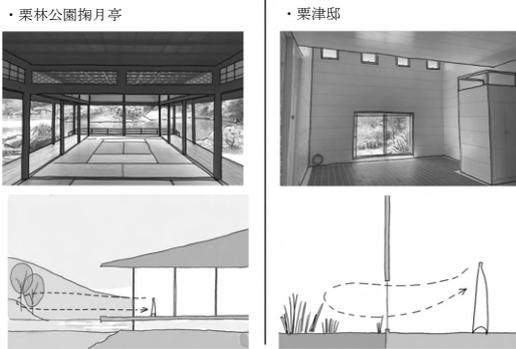


図6 実存的内側性の事例

図6に代表される事例から、場所の実存的内側性が発動される空間の分析を行なった。(図7)

(i)空間の同等性(ii)空間の連続性(iii)意識→動作の順空間把握等による意識の強まりによって〈そこ〉を知覚することで、より強く今いる〈ここ〉の実存を感じられるのではないかと考える。

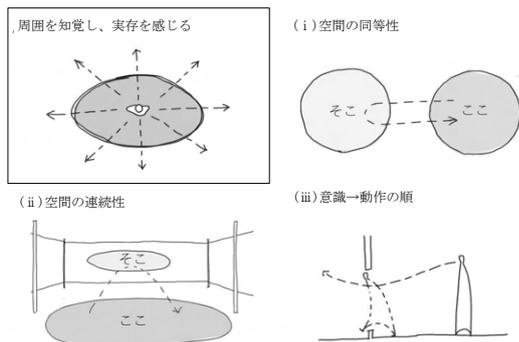


図7 実存的内側性の空間分析

5. 設計提案

5-1. 敷地

敷地は東京都練馬区の都立石神井公園と石神井川に挟まれた住宅街の土地を選定する。石神井公園内の三宝寺池は、かつて石神井川と合流し灌漑用水として利用されて

いたが、戦後の宅地化に伴い合流部分は暗渠となった。そのような都市開発が背景となり、現在は公園と川との場所的なつながりは薄いように感じる。

この敷地は川幅12mの河川や幅員8mのバス通り、2m未満の路地などに挟まれている。そのため敷地内だけでなく、川の対岸や近隣の住戸、公園やバス車内などの多様な距離からの環境との関係性を築くことができると想定する。

5-2. 用途

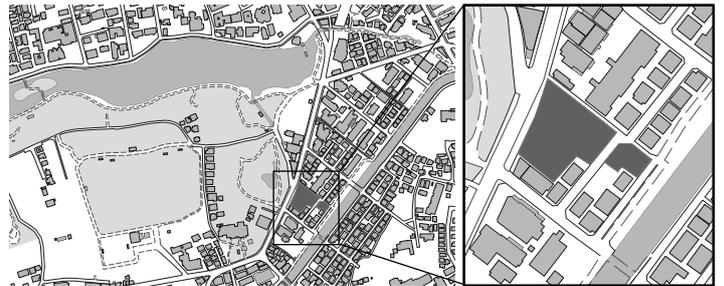


図8 敷地周辺地図

複合用途型の集合住宅を提案する。特別養護老人ホーム、滞在型インキュベーション施設、SOHO、賃貸住宅などの用途を混合させ、高齢者や介護スタッフ、起業家、オフィスワーカー、地域住民などの様々な人々が自分とは異なる環境を認識することで、この地域における場所の連続性を形成する建築を提案する。

5-3. 設計手法

3.4で行なった空間分析をもとに、いま私がいる〈ここ〉を感じることで、時々他者のいる〈そこ〉に対して〈ここ〉を感じることで、を相互に体験できるようなシーンごとの空間設計と配置計画を行う。

また敷地内から敷地外、敷地外から敷地内へと相互に〈ここ〉〈そこ〉の関係性を見いだせることが、この地域全体の場所性の構築につながると考える。そのため周辺環境に基づいて空間の原理を構成し設計する。(図9)

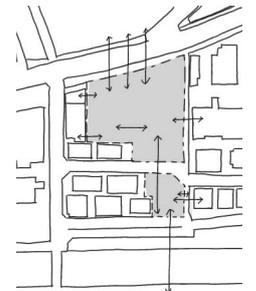


図9 周辺との関係性

全体としては各所で異なる多重人格的な空間構成でありながら、ひとつずつの〈ここ〉にいる感覚が連なることで生まれる場所性のつながりが、私は誰かとつながっているかもしれないと予感させることを期待する。

主要参考文献

- (1) エドワード・レルフ『場所の現象学』筑摩書房1999年
- (2) 石田三千雄『フッサール 相互主観性の研究』ナカニシヤ出版2007年
- (3) 中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店2000年
- (4) JIA 城北地域会からの地域紹介と活動報告

<https://www.jia-kanto.org/johoku/wp/wp-content/uploads/2018/01/KNIT1.pdf> 2024/12/29